



AbBa便り

父の学校季刊誌

14号 夏号

「恐れ」と「プライド」

山中知義 牧師

(京都オンヌリキリスト教会)



船を作る男がいました。人々はこの男の作る船を「もはや芸術の域だ。」と賞賛しました。しかし男はなぜかいつも船が完成に近づくと、それを自らの手で壊してしまうのでした。そしてまた船を一から作り始めるのです。友人たちは皆、一体なぜ男がこのような行為を繰り返すのか、理解に苦しみました。しかしある賢明な老人だけは、男の心の内を見抜いて、こう言いました。「要するに・・・あの男は海が怖いんじゃないよ。」

これは、ある小説に出てくるお話です。男性の心の中に宿る「恐れ」と「プライド」が複雑に絡み合うのを巧みに表現しています。男はあたかも芸術家が、描き損じた絵を躊躇無く破り捨てるように、自ら造った船を破壊します。その行為は、「完璧主義者」の印象を周囲に与えます。しかしそれは虚偽のベールであり、男は、そのベールの下に、誰にも知られたくない恐怖を隠しているのです。しかし、この男が海に抱いている「憧れ」もまた真実です。この男の心は複雑で、狡猾で、矛盾に満ちています。こうして男は、「自分がやっていることをなぜやっているのか」分からないという「混沌」状態へと堕ちてゆくのです。

主は、私たちに「混沌」への後退ではなく、「秩序」へと、前進を願っておられます。

それは主との交わりを通して明示される「人生の目的」という道です。主は男性に、その「目的」に進むだけでなく、周囲にその道を示し、そこへ導く「リーダーシップ」の使命をお与えになりました。

しかしその崇高な使命が、あの船を造る男のように、「恐れ」と「プライド」によって妨げられることがあります。会話の腰を折られ、話題を挿げ替えられると、どこから話が脱線したのか分からなくなるように、「恐れ」や「プライド」のストーリーは、男性に「神様の文脈」を見失わせるのです。

「恐れ」や「プライド」の大きさは、人によって差があります。しかし、御国に帰るまで、決して消すことの出来ない罪の炎です。ですからその炎を「予防する」ことは出来ません。しかし個人と家庭と教会を、混沌へと後退させる競争意識や、分裂意識、また孤立意識に引火することは予防出来ます。

それは極めて単純な方法です。それはすべての人間関係において、「褒め、認め、感謝し、讃える」言葉を用いることです。

米国である教団が主催する青年聖会に出席しました。数日続いたその聖会の間、その教団に属する牧師たちが、講壇の務めを担いました。私はその集会中、あることに気付きました。それは講壇を担う説教者たちが、必ず前セッションの講義を担った牧師を、講壇から「褒め、認め、感謝し、讃える」ということです。最初は自然で、麗しく見えたその光景ですが、講義の度にそれをするものですから、だんだんと不自然で、「空々しく」聞こえて来ました。しかし

徐々に分かって来ました。彼らはわざとそうしているのだということ。その効果の故か、現在その教団は、全米で最も急成長している教団となっています。

「恐れ」と「プライド」を野放しにするところに、神の国は建ちません。私たちは、意識的に、ライバル意識や、競争心の芽を摘む作業をしなければなりません。それが「褒め、認め、感謝し、讃える」言葉です。確かにプライドの高い人に、良い言葉を投げかけるのは簡単なことではありません。その人は、あなたのプライドも高くする傾向があるからです。しかしそれにつき合っている、クリスチャンとしてそこに遣わされた意味が死んでしまいます。すぐに結果が見られる訳では無いかもしれませんが、しかし必ず主はその試みを祝福して下さいます。家庭でも、教会でも、職場でも、私たち男性クリスチャンが、周囲の人々を、混沌ではなく神様の秩序へとリードする、謙遜なリーダーシップを発揮出来るように祈ります。



メトロニューヨーク2期 特集

開催報告

解説リガー：平野博文（メトロニューヨーク1期）

メトロニューヨーク2期父の学校は、4月4,5,6（金、土、日）にニュージャージーにあるボガートメモリアルチャーチにて開催されました。参加者は全部で6名、そのうち1名はロサンゼルスから、来年西海岸での開催を目指して研修を兼ねての参加でした。6名は全員キリスト者ですが、それぞれ信仰の成長過程は異なっていました。しかし父の学校を通して彼らの信仰がさらに1歩前進し、フォーカスが定まった事を確認する事が出来ました。日本からは講師として福澤先生、進行役の李



事務局長、そして小泉本部長が総合管理、昌子姉妹が執り成しの祈りを勤め、2期開催を大いに盛り上げて下さいました。また、韓国父の学校の主要幹部も多数奉仕者として協力して下さいました。

今回の特徴は、第1期生が、病気欠席や日本への帰国者を除き、ほぼ全員が奉仕者として積極的に参加して下さいました。3期からは日本からの応援隊を期待せず自前で行う事を意識した事もその積極的奉仕参加の理由ですが、何よりも父の学校での恵み、それによる実生活での素晴らしい改善を第1期で経験した者が、それぞれ自覚を持って父の学校での学び、祝福を伝える一員として参加した要素が多分にありました。事実3日間を通して奉仕者もまた素晴らしい恵みに預かりました。心配された収支も守られ、次回への向けての貯金も僅かながら出来ました。

昨日はフィラデルフィア郊外の山田兄宅でバーベキューが行われ李先生はじめ1期生家族が集まり楽しい交わりを持つ事が出来ました。父の学校の精神、そしてそこで生まれた交流はそれぞれの属する教会を越えて大きな波紋となって広がって行く事が期待出来ます。来年の第3期、若しくは西海岸の第1期へ向けてまたエンジンを始動させ始めたいと考えています。主に在って。



メトロニューヨーク2期



証し

トロニューヨーク 2期に参加して

「初めの愛」に立ち戻れ

岩淵ダビデ

「私は普段から、良き父親・夫たらんと努め、頑張っている。完璧・完全ではないが、自分でやることはやり、いい線いっているではないか。これ以上、一体何を求めているのか…」と、疑いつつ臨んだ父の学校。しかし、私の独善はいとも簡単に瓦解した。夫・家長として、正々堂々と意見し、家族を霊的に導く意志の強さに欠けていたために、愛する妻を悩ませたこと、また（過去通ったいくつかの教会で）リーダーシップを取ることに戸惑いを覚えたり、自分の考え方と違うやり方をしている兄弟たちを、自分のリーダーシップの欠如を省みることなく彼らを厳しく批判したことで、キリストにある姉妹としての愛する妻を傷つけてしまったことなどについて、これまで気づかずに犯した罪を悔い改め（レビ記5章2-6節）、父の学校の最終日に、愛する妻に赦しを請うた。

また、父の学校の修了式では、「十字架の力で生きる父親たれ」というメッセージが込められた首にかける皮製の十字架を頂き、私は咎の多い自分を十字架にはり付け、古い自分に対して死に、イエスキリストの復活の命によって生きることがクリスチャンの使命であることを、幸いにも思い出させてもらった。そして、十字架の力で生きる父親たちの輪を広げていきたい、と強く願わせられた。

イエスは使徒ペテロに「私を愛するなら、私の羊を養いなさい」と再三命じられた（ヨハネ21章15-17節）。想えば、私がクリスチャンになりたての学生時代に、自分で振り返っても私は主に對する「初めの愛」（ヨハネの黙示録2章4節）に満ちており、その当時初めて読んだヨハネによる福音書の御言葉「私の羊を養いなさい」については、主から自分に直接与られた使命として受取った。実際、私は学生の仲間に福音を伝え、幾人かを救い主イエスへの信仰へと導き、彼らの下宿に通い、マンツーマンで弟子訓練を行なった。しかし、その後アメリカの大学院へ留学、就職して仕事が忙しくなるなか、今になって想うと、その初めの愛から自分は徐々に遠ざかっていったような気がする。ところが、今回の父の学校で、消えていた初めの愛が蘇り、「羊を養う」意欲が湧いてきた。私は、

父の学校が終わった後、近所に住むクリスチャンで、仕事、結婚、子育てに忙しくしている兄弟と、もう一人の父の学校の卒業生との三人で、お互いに御言葉によって励まし祈り合う会を始めた。それまでも、祈禱会を始めなければいけないことは承知しながらも、諸々の口実をつけて先延ばしにしてきた。ところが、今回の父の学校を機に、助けを必要としている「私の羊」を養わずに放っておいてよい訳がないだろう、とイエス・キリストの促しを強く受けたのである。

ところで、私はクリスチャンになり、救いに関する神の御心がすべて言い表されているとされている聖書を真剣に学んでいく過程で、聖書解釈における正確さや善い行いを追及するが余り、他者にも同様の水準を求め、ひいては自分の水準に達していない者をさげすみ、前述のように兄弟たちを手厳しく批判するに至った訳である。これは、エペソの教会の信徒たちが、異端・邪教を正面から拒否していくなかで、互いを厳しくチェックし合うようになり、信仰者が元来持っていた互いに対する愛が影を潜めていった過程と類似している。キリストは、この状況に対し、「初めの愛から離れてしまった」として、エペソの信徒たちに猛反省を促した。健全な教えと純粋な教義とて、神の恵みによる購いの愛を初めて経験した者たちが共有する相互の愛に基づく信頼関係には取って替わることが出来ないからだ。

この度の父の学校では羊を養うことに関して、また兄弟姉妹を自分の教義・規範によって批判し裁いてはならず、お互いにいたわり合わなければならない、という2点について、私を初めの愛に立ち戻らせてくれた。企画・運営に携わり、また祈りを以って支えて下さった皆様に心から感謝申し上げ、主の御名を永遠に褒め称えたい。

東京10期 特集

開催報告



開設リーダー 金聖守(東京1期)

父の学校 東京10期は、4月12日から14日までの3日間、開催された。開催教会は、ライフ・ロゴス教会であった。この教会は東京の韓国人密集地である新宿区にある。

開設リーダーはキム・ソンス（金聖守）、進行者はイ・ヒョンウ（李炯雨）兄が担当した。テーブルリーダーはコン・スンヨン（権純瑩）兄、ジン・ヨンテ（陳英泰）兄、ムン・スンファン（文勝煥）兄が担当した。影響力、使命、霊性、家庭の講義は金聖守が、男性の講義はカン・キョング（姜卿求）牧師が担当した。影響力の証は三谷恭寛牧師、村上厚郎兄、権純瑩兄、文勝煥兄が担当した。それぞれ素直な真実の証により、聴衆は大きな恵みを受けた。管理チーム・リーダーは韓国で10年前に修了したイム・ゾング（林鍾求）兄が担当した。小泉金次郎兄とイ・アンチョル（李安喆）兄が奉仕を務めた。



志願者は15名全員が韓国人で10名が修了した。

東京10期の特徴は、事前に祈りで備えたことである。開催教会の牧師を始め、志願した方々のご婦人たちも祈りに加わった。そして、志願者の年齢層が比較的若かった。そして、身長も高かったため、ユニホームは大きいサイズが必要だった。



東京11期 特集

開催報告

進行者 原田恵己（横浜4期）

父の学校東京11期は、JR王子駅近くの東京オンヌリ教会王子伝道所（通称TEPEL<テペル>教会）で（最終日は飯田橋駅付近の東京教会）、5月11日（土）18日（土）25日（土）6月1日（土）の各週末に土曜日ごと、1ヶ月間に渡る日程で開催されました。

同伝道所の三谷恭寛兄（牧師）が、父の学校新宿2期を修了され、その後もご奉仕をされながらこの学校で受けた体験と恵をご自身の教会でも、との思いから祈り備えてこられ、その日を迎えられました。特に三谷兄ご家族が日頃から祈り、この父の学校への参加をお勧めしてこられた三谷家近隣の参加者も数名与えられ

た事は、神様の祝福でありました。今回の講義は三谷恭寛兄（影響力・使命）・池川豊吉兄（男性）・小泉金次郎兄（霊性）・金聖守兄（家庭）らが担当され、開設リーダーは笠原誠規兄、進行者は初日～3日目は原田が、最終日は池川豊吉兄、管理チームリーダーは笠原誠規兄が中心となり新しく奉仕に加わった兄弟も含め、多くの兄弟姉妹のご協力を頂きました。

会場は韓国人の兄弟のテーブル、日本人の兄弟のテーブルに別れ、涙ながらのお証、交わりが聖霊様のお導きの内に進められ（未信者の兄弟の参加もあり）、素晴らしい学び、気づきの時となりました。これは、とりなしチームの小泉昌子姉が中心となり、志願者や奉仕者のご婦人達により、会場から少し離れた三谷兄のお住まいのマンションの会議室で、熱心な祈禱がなされたことも大きな力となったと確信いたします。

全参加者の「自分自身をそして家族を何とかしたい！このままじゃダメだ！」という思いが会場に溢れ、今更ながら神様の迫りとご愛が去来する恵まれた時間となりました。

今回、修了生は4名、諸事情により最終日は参加できなかった方が7名でした。合計11名のそれぞれのご家族の上に聖霊様の顕著なお働きがなされますように、引き続きお祈りくだされば幸いです。



証し

「父の学校」を振り返って

東京11期 趙 竣植

「主よ！私が父親です！」

「父が生きると、家庭が生きる」

今も耳に生々しく聞こえてきます。この二つのスローガンは、「父の学校」のすべてと言っても過言ではないでしょう。

数年前から愛する妻から「父の学校」に参加するよう耳にタコができるほど聞かされてきた

私は家では父親として0点でした。自分の意志半分、他人の誘い半分で参加することになった「父の学校」。

5月11日、東京オンヌリ教会王子伝道所「TEPEL」で、11人で始まった東京11期の教育は、私にとって大きな祝福でした。私は韓国人のチームに属し、最初はとてもしこちなくて恥ずかしいでしたが、交わ

りの中で、個人や家庭の問題がない人は誰もいないことが分かりました。一方、私と同じ苦しい経験をされた方々もおられ、皆さんの率直なお話で、お互いをよりよく知っていくのが本当に楽しいでした。私のチーム名は「友達のような父親」で、掛け声は、「遊んでくれ、聞いてくれ、話してくれ」でした。

毎度2回のメッセージ、チーム別の分かち合い、宿題（愛する妻、子供、父に手紙を書く）の発表など、単に参加者ではなく主人公として受けられた「父の学校」で、現在の自分自身の姿が客観的に見えるようになりました。

初日は聖書のアブラハムを通して、父親の誤った行動は子供にも繰り返されることで神様が喜ばれない行動だと学び、今までの誤った行動をすべて捨てられますように、これ以上子供に悪い影響がないように祈りました。

結構厳しかった父から少しのミスでも容赦なく叱られた私は、家族を持つと父のように絶対したくないと決心しましたが、子供が生まれて育つ過程でいつの間か私も父のようになっていました。それに気づいて冷静に話そうと思っていてもミスを犯したのを見ると怒りを抑えきれず爆発することが茶万事でした。今回の「父の学校」を通して、愛する子供と妻に数えきれない程の傷をつけてしまった自分が恥ずかしくて申し訳ない気持ちでいっぱいでした。愛する妻と子供たちに、そして韓国にいる父に手紙を書きながら、そばにいる時、まだ生きている間に、思い出をいっぱい作り、沢山の会話をしようと思いました。

最終日は、愛する妻と一緒に参加しました。愛する妻が私に書いてくれた手紙を泣きながら読む時に

は、もっと優しく接してあげなかったことに心が痛みました。そして、最後のハイライトである洗足式では初めて洗った妻の足がとても可愛かったです。心から本当に愛さなければならないと思いました。

感想文を書いている今は、「父の学校」が終わって2ヶ月が経ちますが、再びその時の感動がよみがえり、固く決心したのに時間が過ぎて少し気が緩んでいる自分にもう一度初心に戻って昔の生活に戻らないように意志を強くするよう神様に祈ります。愛する子供たちはお父さんが昔よりも毎日のような怒りの姿はなく、色々な会話をするようになったことで「お父さん、少しずつ変わっているね」と言ってくれて、本当にうれしいです。

そして何よりもこれを実行できるように努力している自分を見ていると、4週間の時間は決して無駄な時間ではなく、私にとって人生で指折り数えるくらいの貴重な時間でした。最後になりますが、参加を強要(?)された笠原兄弟、そしてスタッフとして参加した多くの兄弟たち、今も私を信じて私のために祈っている愛する妻に心から感謝いたします。



【事務局便り】

◆ 開催報告

メトロニューヨーク2期（4月5-7日）

講師：福澤満雄師、立石 尚志師、李 起燮師

日本からの奉仕者 進行：李 炯雨兄

総合管理：小泉 金次郎兄、 執り成し：小泉 昌子姉

・東京10期（4月12-14日）

東京ロゴスライフ教会 開設リーダー：金聖守兄

進行：李炯雨兄 講師：姜卿求師、金聖守兄

・東京11期（5月11,18,25,6/1日）

東京オンヌリ教会王子伝道所（TEPEL）及び

在日大韓・東京教会 開設リーダー：笠原 誠規兄

進行者：原田 恵巳兄、池川 豊吉兄

講師：三谷恭寛師、池川豊吉兄、小泉金次郎兄、

金聖守兄

・埼玉西1期（7月13-15日）

狭山キリストの教会

開設リーダー：金聖守兄 進行者：小泉金次郎兄

講師：福澤満雄師、金聖守兄

◆ 今後の開催予定

・大阪8期（9月21-23日）

・酒田1期（10月12-14日）

酒田キリスト教会（山形県酒田市）

開設リーダー：高橋富三師 進行：今井和彦兄

・神戸6期（10月12-14日）

・新潟3期（10月12-14日）

新潟主の港キリスト教会（日本バプテスト連盟）

開設リーダー：松縄兄 進行者：金森兄

・神戸6期

・鹿児島1期（11月2-4日）

日本バプテスト連盟伊集院キリスト教会

【献金のお願い】

今後の父の学校の開催は鹿児島、ロサンゼルス、サンフランシスコと遠距離での開催が続いています。その為には約150万円が必要です。

その事にご賛同頂ける方は献金をお願いします。

◆ 献金して下さった方々

ありがとうございました。

「父の学校」千・千基金、感謝献金、諸指定献金

団体・教会・個人献金者（敬称略）

2013年

3月 福澤満雄 遠藤茂雄 比嘉正勝 岩崎鉄男

4月 福澤満雄 遠藤茂雄 比嘉正勝 岩崎鉄男

5月 岩村聖一 福澤満雄 遠藤茂雄 岩崎鉄男 中村俊夫

比嘉正明

6月 福澤満雄 遠藤茂雄 岩崎鉄男 比嘉正勝

金森一雄 金聖守 高田ファミリーチャペル

* 献金の送金方法

① ゆうちょ銀行「自動送金サービス利用」

毎月1,000円1口（何口でも結構です）

口座：「父の学校 日本運動本部」

記号：10140 番号：1839181

ご自分のゆうちょ口座より毎月自動引き落とし。窓口にてお申し込みいただけます。送料120円はご本人または受取人（本部）負担。受取人負担とする場合は、申込み用紙に本部の届け出印が必要です。お申し出いただければ、届け出印を押して、送金人様に送付いたします。

<ゆうちょ同士の振り込みは、手数料無料です>

本部推薦！！

② 他金融機関からの振り込み

「ゆうちょ銀行」【店番】018

【預金種目】普通預金 【口座番号】0183918

今後ともよろしく願いいたします。

